はじめに

この本をまさに今、手に取ってくださっているあなた、出会ってくださって誠にありがとうございます。みなさまの中には「私もヒーラーなのだろうか？」と自信なさげにこれを読んでいる方もいらっしゃるかと思います。はじめにお伝えさせていただきます。この本に出会ったということは、あなたもヒーラーで、サイキックです。そのことを思い出しながら、その能力を開花させ、日常的に使えるようにする、それがこの本の目的であり、私の願いです。

ここでエピソードを一つ。私は今、アメリカのミシガン州に住んでいます。ミシガンの冬はとても寒く、長いです。札幌と同じ緯度にあるので、北海道の冬を想像していただけると、わかりやすいかと思います。そんな寒い冬のある日、ガレージ・ドアの自動装置が壊れ、開けっ放しになったドアを手動で閉めようと、ドアのジャバラの隙間に手をかけました。悲劇はこの後に起きます。隙間に手をかけ、思いっきりドアを降ろした私は、なんと、なぜか手を抜くのを忘れ、ドアは私の手を挟んだまま閉まってしまったのです。

ヤバイ！　と思ったときにはすでに遅く、私の手は挟まったまま、身体は宙ぶらりん状態になりました。私は、かろうじてつま先立ちになっている足で必死に重いガレージ・ドアを上げ、やっとの思いで手を抜いたときには、指はうっ血して紫色になっていました。痛みで吐き気がしました。出かけるつもりでしたが、運転なんてできる状態ではなく、私はそのまま家の中に戻り、ソファーの上で数時間じっとしていました。でも、指から伝わってくるジンジンという痛みは全身を周り、指は3倍くらいに膨れ上がりました。「折れているかもしれない」と思い、友人に救急に連れて行ってもらったところ、医者にも「う～ん、折れている可能性が高いからレントゲンを撮りましょう」と言われました。

結局ラッキーにも折れてはいませんでしたが、全治2週間。私はその間「おかしい、絶対おかしい。この歳でケガなんて、絶対おかしい」と、根拠のない「おかしい」を頭の中で繰り返していました。さらに私は「絶対理由があるはずだ。なんで指なんだ。指をケガしたんだから、手だ。手になにかあるはずだ」とじっと手を眺めました。ずーっと、ずーっと、眺めていました。

そしてふと、ある異変に気づいたのです。温かい……私は末端冷え性で、真夏でも氷のように手足が冷たい。なのに、手が温かい……おかしい、絶対なにかがおかしいのです。そう思いながら、さらに手を眺めていると……なにか、出ている……手から何か出ていたのです。そして急に、何年も前に知り合いが言っていた言葉を思い出しました。「急に手から氣が出るようになってね～」私の手から出てい

る、目に見えているような、見えていないようなこれは、「氣」なのか？　そういえば、知人は、あれから霊気マスターとして活躍していると聞いていました。彼に聞いてみようと、早速連絡をとってみたら、「おいでおいで」と快く家に招待してくださいました。彼は、ビジネス一筋だった仕事を定年退職しており、その日も優しい眼差しで私を迎え入れてくれました。「どれどれ、手を出してごらん」と言うので、手を見せたら「ああ～出てる出てる」と、さも当たり前のことのように言いました。やっぱり……でも、氣が出ているのはいいとして「じゃあどうするんだ？　なにをしろと言うのだ？」と、目に見えない何者かに問いかけました。理由はともかく、私にケガをさせてまで気づかせたかったことがただ「手から氣が出ていますよ～」だったのだとしたら……ケガした指の爪は長い間ドス紫色だったし、爪は変形したし、指の感覚もいまだに変だし、治療費はかかったし、だいたい、すっごい痛かったし、「もっと他の方法なかったんですか～！」と私は思いました。

この日を境に、今まで気にも止めたことのないゾロ目を頻繁に見るようになったり、おでこ（松果体）がうずくようになったり、瞑想するようになったり、声が聞こえるようになったり、過去世の記憶が蘇ったり、人のエネルギーが曼荼羅模様で見えるようになったり、ヒーリングができるようになったりしました。そしてこうやって「宇宙と繋がる」ようになったら、サイキック能力も開花していきまし

た。とはいえ、当時の私にはわけのわからないことばかり（この頃の不思議体験は、私の著書『アシュタールと私』（ヒカルランド）に書いています。よかったら是非読んでみてくださいね）。こうやって、わけのわからない状態のまま、私のヒーラー人生が始まりました。

あれから数年が経ち、今ではアセンション・ガイドとしてセッションや執筆活動をさせていただいておりますが、たくさんの方々との出会いの中で、私が確信したことがあります。それは、誰もが、生まれながらのヒーラーであるということ。みなさんには、私のような痛い思いをせずに、そのことを思い出していただけたらと思い、この本を書こうと思いました。宇宙に変わって、もう一度私が言いましょう。あなたもヒーラーです。すでにヒーラーであるあなたが、ヒーリングのエネルギーを使うことは、あなたがよりあなたらしく生きるということ。あなたのその力を、どう開花させ、どう使っていくのか、この本が少しでもその参考になれたら、嬉しく思います。